

たくましく生きた人々～太鼓の響きを今に～

第6講座 同和問題と人権

人権教育担当チームは2日続けて早朝作業。実は、今日の第6講座午後の部で使われる「牛皮革」の水漬け、もどしの作業です。乾燥した状態の皮革は、まるでプラスチック。大きなバケツに水を入れ、1枚ずつ浸してゆきます。乳白色の皮革が、少し透明感を帯びて、パールオレンジに近づいていきます。

24時間後、皮革は見事にふやけた状態で水に沈んでいます。今度は1枚ずつ引き上げては新聞紙に挟んで、じっくりと水分をとっていきます。これが太鼓に張られるのが、今日の午後です。

さあ、第6講座はどのような感じになるのでしょうか・・・。

1 講演 太鼓の響きをなにわの街に！

〔Japanese Drums Orchestra WARAKU 代表 坂東 誠さん〕

もともと、太鼓は「楽器」として扱われたものと、「道具」として扱われたものの2種類がありました。日本を含む多くの国や地域においては、ほとんどの場合太鼓は「道具」でした。例としては、戦鼓（鉦打ち太鼓 鎧兜とともに使われた。戦での、伝達や時報などの道具）ですね。室外での使用が主となる鉦打ち太鼓でした。これは、戦だけでなく、日常生活においても民衆の間に浸透していました。半鐘（現代のサイレンの役割）などは、よく時代劇にも登場しますし、武道場の稽古の合図は太鼓ですね。

しかし、太鼓にはもうひとつの種類と役割がありました。祭礼や宗教的な行事の中で「楽器」としての役割を与えられたものです。時代背景もあつたのでしょうか。いわゆる「楽器としての太鼓～紐締め音階のあるもの～室内音楽用楽器」がそれです。

すべての人にとって、その生活に欠くことのできないものとしての「太鼓」。太鼓によって豊かに過ごすことができた人々と、それを支え続けた太鼓職人たち。皮革を活かし、胴を活かし、被差別の立場にあつて、胴の中に花押を忍ばせる職人の姿。

その歴史を、坂東さんは静かに語ってくださいました。「職人は太鼓をつくることはあつても、決して打つことはありませんでした。それが職人の『分』やつたからです。けれど、現代に生きるわれわれは、その職人の技術だけでなく、その『音』もいっしょに、響かせたい、伝えていきたいんです。」なにわの街の太鼓集団「怒」の結成と、そこにつながった仲間の話から、人権問題にふれる機会を多く得て、さらに豊かになっていく。そんな、坂東さんの話に、参加者一同、スーッと引き込まれていきました。



2 演習・教材研究 自分の手で太鼓をつくろう！



いよいよ太鼓組立の実際です。

皮革にポンチで穴をあけて・・・。

「タンツ！タンツ！」金槌の小気味良い音が響きます。

「いやあ、むずかしい。」「皮、ちぎれんろうか？」参加者一人一人、童心に返ったかのように、真剣な表情で太鼓を組上げていきます。

太鼓職人が長い年月を重ねて積み上げた太鼓作りの技術に、少しでも触れよう、子どもたちに生（まさに書いて字の如し）の太鼓の感触を伝えたい、みなさん、そんな気持ちでしょうか。

およそ2時間後、音色さまざまな太鼓ができました。

ポーン！ターン！タンタタン・・・。

つくってみると、時間は意外と短かつたけれど、「やま」の張り方、皮の伸ばし具合、そして手に残る皮の感触。被差別部落の「かわた」職人が、そして、太鼓職人が誇りを持ってつないできた、

「暮らしのなかのいのちを活かす産業」を感じられる、そんな1日でした。

